

桜花満開の候 宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員の皆様には、恙なくお過ごしのことと大慶に存じます。当県も先月上旬に新型コロナ蔓延防止措置も解除され、徐々に平穏な日常が戻ると思われた矢先、突如？ロシアのウクライナ侵攻が始まり、私も関連 TV ニュースに釘付けの毎日です。

遠く離れた日本では桜が咲き誇る中、春の選抜甲子園や大相撲の大阪場所が始まり、プロ野球やJリーグ等も開幕し正に春爛漫の様相を呈していますが、砲爆撃が続くウクライナでは連日のように幼い子供を含む数百人の人々が傷つき落命していると報道されています。

21 世紀の今、こんな理不尽が許されるのかとの思いに心は千々に乱れますが、これが世界の厳しい現実であり、改めて国土や国民の生命財産を守ることの大切さを痛感せずにはおられません。

3 月に予定されていた自衛隊関連行事等は、各部隊長から規模縮小や部内関係者の参列で開催するとの連絡が届き、今月も特に皆様にお知らせすることはありませんが、3 月 5 日は宇都隆史参議院議員の国政報告会、同 28 日は宮崎県護国神社にての「特攻勇士慰霊祭」に参列して来ましたことをご報告致します。

さて小川先生の定期メルマガも今月末で終了し、皆様にお届けできるのは本文で最後となりますが、今後は不定期での発行を予定されているらしく、又その都度掲載をさせて頂くつもりです。

・ウクライナの抵抗の凄み

ウクライナ情勢を見るにつけ、一日も早くロシア軍の侵攻が止まり、それが撤退するなかで破壊された町々の復興が始まることを願わずにはいられません、いま、とても気になってならないことがあります。

それは、ロシア軍がどのような形でキエフやハリコフといった大都市を攻略しようとしているのか、という点です。ロシア軍は戦略目標であるキエフの攻略のために、最も距離的に近いベラルーシからのルートを主攻軸に決めました。

ロシア軍の兵站能力の問題は 1/17 号で西恭之氏(静岡県立大学特任准教授)が詳しく書いた通りですが、その弱点を補う事もあってベラルーシ軍との合同演習を設定したと考えられます。

しかし、これまでも書いてきたように今年のウクライナの**気温は高く**、原野が凍結することなく**泥濘地化**してしまいました。キャタピラを履いた戦車や歩兵戦闘車でもスリップして尻を振りますから、**進撃速度は極端に鈍ります**。

そのうえ、**戦車を至近距離からの攻撃から守るために必要な歩兵を乗せた装輪式の装甲車**は、すべての車輪にチェーンを巻いても**スリップ**するため、戦車などキャタピラを履いた車両と**行動を共にすることができません**。

自然、**戦車と歩兵が切り離される結果**となり、戦車や装甲車の**乗員**は身を乗り出して周囲を見回せば**狙撃**されますから、閉じこもった状態を強いられます。その結果、肉迫してくるウクライナ側の**対戦車火器**や住民が投げつける**火炎瓶の餌食**となっていくたのです。

そうすると、**原野を突っ切った進撃を諦め**、**主要幹線道路**を使うしかありません。そこに待っているのは**大渋滞**。ウクライナ側は危険を冒して渋滞した隊列を攻撃しないでも、進撃を阻み、補給線を止める戦果を手にすることができたのです。

こんな「**泥将軍**」との戦いが待っていることは、**ロシア軍**としては**百も承知**だったと思われますが、**プーチン大統領の号令**一下、侵攻することになったのでしょう。

おまけに**ウクライナ軍**は 2014 年のクリミア併合の後、**米国の軍事顧問団の教育訓練**を受けており、**強大なロシア軍との戦いに適した兵器**を多数備えてきたと思われます。万遍なく兵器を揃えた形だけの軍隊ではなく、**巨人をひと突きで倒せるような軍事力**だと言ってよいと思います。

そこから手にした果実は、**米国製のステインガー**携帯式地对空ミサイルによる **Ka-52M 戦闘ヘリコプター**の撃墜、**ジャベリン**対戦車ミサイルやトルコ製**バイラクタル TB2 無人機**による戦車の撃破となって表れています。

欧米の専門家の指導による**サイバー攻撃**も、**ロシア軍の司令部と前線部隊との指揮命令システム**を機能不全に陥らせているようです。

さらに、ウクライナが突出させているスナイパー(狙撃手)の存在があります。指揮官が狙撃されると、その部隊は狙撃を警戒して数日間は動きが止まると言われます。そのウクライナのスナイパーは、ロシア軍のアンドレイ・スホベツキー少将(第7空輸師団長)ともう一人の少将の狙撃にも成功しています。ロシア側の狼狽ぶりが目に見えるようです。

ウクライナ側では、編集者出身の女性スナイパー、オレナ・ピロゼルスカが抵抗のシンボルとなり、アフガニスタンなどで知られたカナダ軍のスナイパー「ウォリ」が志願したという情報もあります。装甲車やヘリに有効な対物狙撃銃はカナダ製が導入されたとも言われます。

このスナイパーやサイバー部隊は、ウクライナの市民が自発的に参加したケースも多く、さらに大きな戦力になっていくと思われれます。ただでさえ士気が低下しているロシア軍の身になってみれば、こんなウクライナとは戦いたくないというのが本音でしょう。

あとは、キエフなどを包囲した状態のまま停戦を迎えるか、破壊の限りを尽くしてでも一気に攻略に出るか。後者の展開にならないことを祈らずにはられません。(小川和久)

このメルマガの発行日付は3月14日なので些か旧聞に属しますが、これからの戦局は東部制圧を目指してマリウポリ攻防戦へと戦略転換を図るとか、またトルコを仲介として停戦交渉のテーブルにも双方の責任者が着くらしいとか、TV新聞等では報道されています。

この戦争を止めるのは、この戦争を始めたプーチン大統領の外に無く、ウクライナ国民の悲惨な状況等を映像で見る度に、凄まじい兄弟喧嘩をした後の「しこり」は今後50年や100年くらいでは決して氷解しないだろうと考えるところです。

大正15年生の亡父は、旅順師範学生当時を思い出して乍ら「和彦、日ソ不可侵条約を破棄したソ連を絶対信じるな」と幼い私を膝に乗せて、真顔で言い聞かせるのが晩酌後の日課でした。

ウクライナの災禍を他山の石として、日本の国土防衛や憲法改正について真剣な議論をする時期は、まさに今しかありません。

令和4年4月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小倉和彦